

実践・活動報告

名古屋市立大学大学院看護学研究科の国際交流プログラム ーハルリム大学看護研修の実施ー

The international exchange program of Nagoya City University Graduate School of Nursing.
- The short-term study abroad program with Hallym University -

金子典代¹⁾ 樋口倫代¹⁾ 天野 薫¹⁾
脇本寛子¹⁾ 中神克之¹⁾ 山口知香枝¹⁾

キーワード：看護研修, 国際交流, 韓国

Key words : Nursing Training, International Exchange Program, Korea

抄 録

韓国ハルリム大学看護学部との交流プログラムの一環として短期研修（4回目）を実施し、2019年9月1日から8日にかけて看護学部の学生5名（2年生2名、3年生2名、4年生1名）を派遣した。春川市ハルリム大学看護学部での専門の講義の聴講と演習への参加、参加学生による日本の看護、保健制度に関するプレゼンテーション、ソウル市内の東灘聖心病院（ハルリム大学付属病院）の見学、学生間交流を行った。今回は日本と韓国の冷え込みがある中での実施となったが、ハルリム大学側の配慮・協力も得て実施することができた。参加学生は期待した以上の学びや成果があったとの評価を行っていた。教員間交流の開始から、2020年度末で10周年を迎える。今後もより本研修の成熟を目指し、共同研究の輪が広がることが期待される。

I. 序 論

看護学部では、韓国ハルリム大学看護学部との交流プログラムの一環として短期留学プログラム（4回目）を実施し、2019年9月1日から8日にかけて看護学部の学生5名（2年生2名、3年生2名、4年生1名）を派遣した。その概要を報告する。

ハルリム大学との学部間交流は教員交流を平成23年度より開始し、平成24年には初めて本学学部生4名をハルリム大学へ派遣する短期留学プログラムを実施した。その後も、大学間で派遣と受け入れを継続的に実施し、令和元年度は本学学生の4回目のハルリム大学看護学部への派遣となった。本年度は国際交流委員メンバー2名（金子典代、樋口倫代）に加え、ハルリム大学との共同研究のメンバーであ

る天野薫もプログラムに随行した。

本プログラムを通して、参加学生が日本とは社会、文化的環境が異なる韓国における看護、医療の状況、看護教育の実際を学ぶことを目的とする。具体的には、ハルリム大学看護学部で授業や演習に参加し、病院での実習、学生間交流を行い、国際的視野を広げること、学際的思考を身に付けること、異文化コミュニケーション能力を向上させることを目指す。

II. 本年度のハルリム大学留学プログラムの準備

1) 参加学生の選出、渡航までの準備

平成30年度はハルリム大学看護学部学生の受け入れを行ったが、その際にボランティアとして関わった学生や、他にも学部生に対して講義を通じて本プログラムの紹介・広報を継続的に進

受理日：2020年1月29日 採択日：2020年1月30日

¹⁾名古屋市立大学大学院看護学研究科

てきた。また年度初めの各学年のオリエンテーションで本プログラムを紹介し、総合説明会を4月16日に実施した。応募者を5月に募集し、参加趣意書、TOEICのスコアなどの提出を参加応募書類として求めた。また5月の3日間に分けて申込者全員（9名）に対してグループ面接を行い、参加の目的や英語力、コミュニケーション能力の判断資料とした。最終的には面接点、学業成績（GPA）とTOEICのスコアも参考に、5名の学生を選出し、教授会にて承認を得た。参加学生には、事前の説明会を複数回にわたり実施し、準備を行った。また大学生協のサポートを受け、航空チケットの手配、宿泊先の選定を行った。なお、ハルリム大学所在地である春川市滞在時の宿泊先との連絡調整はハルリム大学看護学部からの支援を得た。保険（加入を必須とする）現地宿泊費、は学生の自己負担であったが、渡航費については名古屋市立大学後援会より金銭面支援を受けた。これらの後援会の支援に関わる事務手続きは、学術課国際交流係、看護学部事務室より全面的なバックアップを得た。なお、2019年には、日韓関係の冷え込みがあり、この件に関して、安全面での対策の協議、随行教員の調整、渡航に関しての学生への注意喚起、スケジュールの調整（ソウ

ル市内観光の中止、ソウル市内への移動についての安全確保の依頼）を適宜8月から渡航直前にかけて実施した。渡航までの一連のスケジュールは表1のとおりである。

ハルリム大学側では、Eun Hee Lee 准教授が今回のプログラムのコーディネーターを務め、本学教員（金子）と連絡を取り合った。また多くのハルリム大学のボランティア学生が今回のプログラムにおいて、本学学生の春川市やソウル市でのプログラム参加、生活面、通訳などを担った。

Ⅲ. 短期研修プログラム内容（表 2-3）

出発日は中部国際空港に7:30に集合し、予定通りインチョン国際空港に到着した。教員の引率のもと春川市に高速バスで移動し、滞在先のホテルに到着した。2日目はオリエンテーション、学生ボランティアとの交流、キャンパスツアーを実施した。3-4日目は講義の聴講と演習への参加、本学学生による基礎看護学の講義内での60分にわたる日本の看護、保健制度に関するプレゼンテーションの実施をした。5日目からは、ソウル市内へ移動しハルリム大学付属病院の見学を実施し、病棟やICUの見学、シミュレーションセンターの見学を行った。プログラム最終日は、今回のプログラムの振り返りを

表1 『平成31年度ハルリム大学国際交流』学生選考・準備スケジュール

内容	令和元年度
学生へのアナウンス（掲示） 応募申込書配布	4月3日
学生を集めての説明会の実施	4月中に昼休みに説明会を実施
応募申込締め切り	5月17日
面接日時の決定と学生への連絡	随時
グループ面接	5月23日-5月31日
国際交流委員会にて派遣学生を決定	6月18日
学部教授会にて選考結果を報告 教員・学生の海外派遣を審議	7月2日教授会
学生に派遣決定を通知	7月3日以降
ハルリム大学側へ連絡し最終調整を開始、旅行業者と打ち合わせ	7月-8月
日韓関係の冷え込みに関して、安全面での対策の協議、随行教員の調整、渡航に関しての学生への注意喚起、スケジュールの調整（ソウル市内観光の中止、ソウル市内への移動についての安全確保の依頼）	8月

ハルリム大学看護学部学部長、本学とハルリム大学プログラム担当者計2名、ハルリム大学看護学部教員5名、ボランティア学生が参加した。カフェテリアでパーティーが開催された。土曜日はハルリム大学の学生と春川市内で交流を行い、一週間の留学プログラムを終了した。

なお、1-3日目までは天野教員が随行し、3日目-4日には樋口委員がソウル市内にて随行、5-8日目は金子委員が春川市内にて随行を行った。

以下の各プログラム報告は提出された感想より、提出者（参加学生5名）の許可を得て加筆修正のうえ転載した。

1) 授業への参加を通じて感じたこと

ハルリム大学は100人ほどの学生をクラスで分けおおよそ20人もしくは50人ほどで授業を受けるといった形となっている。演習の授業では20人程度の少人数となっているため、学生一人一人と教員の距離が近く、質問や指導を仰ぎやすい環

境であった。また実習着は動きやすいズボンにシューズで白衣を羽織るといったようだった。吸引の演習では、滅菌器具の袋などを、器具を取り出した後ワゴンの下段にしまうのではなくそのまま床に落としていたことが印象的だった。また1年生の演習では、2時間半の講義の中で手術時の防護服装備、静脈注射、問診、吸引、CPRをそれぞれ教員が手本を示しつつ、全員、もしくは2,3人の学生が実施していた。講義において資料はすべて英語で書かれており、教授によってはすべて韓国語で説明したり、英語を交えて授業を行っている様子だった。ただ臓器名や病名などはすべて英語で学んでいた。私は日本語のみでしか知らなかったため授業についていくことができず、知識の差を痛烈に感じた。

講義においてとても印象的であったのは韓国人学生の学習に対する姿勢である。居眠りをしている学生はおらず、メモを取りながら真剣に講義を聞いている姿が印象的であった。またところどころ

表2 2019 International Exchange Program for Students from Nagoya City Univ

	AM	PM
9/1 (Sun)	Arrive at Seoul (Incheon Airport) at 11:25	
9/2 (Mon)	<ul style="list-style-type: none"> 11am-1pm Welcome meeting and lunch (D1 room) 	<ul style="list-style-type: none"> Hallym university campus tour with buddies
9/3 (Tue)	<ul style="list-style-type: none"> 11am Presentation (Fundamental Nursing & Practicum, 7425, Prof, Shin, Dongsoo) Lunch: school cafeteria 	<ul style="list-style-type: none"> 2pm-4pm Class participation (Basic Science for Nursing2, 7319) 4pm-Exchange with nursing students
9/4 (Wed)	<ul style="list-style-type: none"> 9am30 - 12pm Class participation (Integrated Nursing Practicum, 7425) Lunch: school cafeteria 	<ul style="list-style-type: none"> 2pm-4pm Class participation (Adult Nuring3, 7324) 4pm- Exchange with nursing students
9/5 (Thu)	<ul style="list-style-type: none"> 8am - 10am30 Move to hospital by school van. 11am - 4pm Hospital & Simulation Center tour (Hallym University Sacred Heart Hospital in Gyeonggi-do) 4pm30 - 7pm Move to Chuncheon 	
9/6 (Fri)	<ul style="list-style-type: none"> 11am - MD Wrap up (D1 room) MD - 2pm Lunch 	<ul style="list-style-type: none"> Tour
9/7 (Sat)	<ul style="list-style-type: none"> Tour 	<ul style="list-style-type: none"> Tour
9/8 (Sun)	<ul style="list-style-type: none"> Students leave (Incheon Airport) at 19:05 	

宿泊先：春川市 世宗ホテル 15-3 Bongui-dong, Chuncheon, Gangwon-do, 大韓民国

表3

Hospital and Simulation Center Tour - Hallym University Sacred Heart Hospital -

1. Date : 2019-9-5 (Thu) 11 : 00~16 : 00
2. Place : Hallym University Sacred Heart Hospital, Hallym Simulation Center
3. Participants : 5 Students from Nagoya University, Professor Oh, Younjae
4. Program

Time	Program
11 : 00 - 11 : 30	Welcome ceremony
11 : 30 - 12 : 30	Introduction of hospital
12 : 30 - 13 : 30	Lunch
13 : 30 - 14 : 30	Hospital tour
14 : 30 - 15 : 00	Move to Simulation center
15 : 00 - 16 : 00	Simulation center tour
16 : 00 -	Closing ceremony

ろ立って授業を受けている学生がおり後に理由を聞いてみると、眠たくなったら立って授業を受けることが許可されておりそれが普通であるということだった。韓国では相対評価であるため優秀な成績を取めることができる学生は限りがある。一方で上級総合病院に就職するためには成績が必要であるということから講義は大切であるとのことだった。このような就職状況にかかわらず私は、この韓国の学生たちの学習に対する真摯な姿は見習うべきであると強く感じ、自らも刺激を受けた。

2) ^{ドンタン}東灘聖心病院での研修

ソウル市内にあるハルリム大学付属の東灘聖心病院の見学をさせていただいた。東灘聖心病院は mobile (モバイル) ICU {160cm程の人なら立てるほど日本の救急車よりも高さや広さがある。医師の判断に応じて ECMO (エクモ) を載せて、使いながら患者さんを他院から運んでくる}、ECMO、ロボット手術や移植といった最新のテクノロジーの駆使した高度医療を提供している。そのため、平均在院期間は5日と短く、患者さんは状態が安定したらすぐ他の病院に転院して加療や経過観察を行う。ICUでは、個室の陽圧室には移植が終わった患者さんや、ECMOをつ

けた肺移植を待つ患者さんなどがみえた。私達が見学させて頂いた部屋は2名で1部屋を使用しており、患者さん同士の間にはカーテンはない。部屋と廊下の仕切りは上半分がガラス張りの壁だった。その分、部屋に閉じ込められている、孤独といったイメージは少ないだろうと感じた。日本では、「個室数は general ICU の場合は集中治療部病床数の 20 ~ 25% が目安となるが、収容患者の種類や重症度、スタッフ数などを考慮し、感染防止対策、患者のプライバシー保護なども重視して決定すること。」とあり、私もそのように考えていた。一般病床の患者さんにも、安静度、感染予防、盗難防止のために病室外への移動は制限がある。一方、患者さんの入院による孤独感やストレスを考えると、一緒に病気と闘っている人がいるという仲間意識や、患者を支える家族同士の関係構築のきっかけ、看護師といった周りの人に見てもらえているという安心感を得られるために、多少開放的な空間は必要であると考えた。私達が実習をさせて頂いている名古屋市立大学病院では各階に食堂があり、外の景色が見られて、家族や他の患者さんと談笑できるスペースがある。これは、患者さん自身で個人情報管理をして、先述した開放的な空間の利点を実感できる良い設備だと再

認識した。今後は、ICUにおけるプライバシーの保護と開放的な空間の両立を目指すことが両国に必要なと気づいた。

病院実習では長崎で3か月研修をした経験があるという看護師の方が流暢な日本語で説明をしてくださり、私たちも日本語で質問をすることができたので詳しくお話を伺うことが出来た。韓国は合計特殊出生率が1を切っており日本より深刻な少子化の状況である。そのため分娩の機会も少なく産婦人科は新卒の看護師をあまりとらないとのことであった。また、それにより学生の実習も行うことができない状況もあるようであった。出産平均年齢は34歳で高齢出産が進んでおり、晩婚化または独身の割合が増えているという社会問題があった。看護師は、1人が10から11人の患者を持つということであった。激務で仕事がつらいということから離職率は30パーセントにも及ぶ。一方で男性看護師が増えている状況で、1100人の看護師の中で67名の男性看護師がいるとのことであった。

3) シミュレーションセンターの見学を通じて感じたこと

シミュレーション施設の見学を行い、内視鏡と腹腔内手術の手術におけるシミュレーションを実際に行い、機械を操作することができた。また、シミュレーションのマネキンは循環モニターと連動しており、脈拍が早くなると実際の人形の脈も速くなる。またマネキンでは、脈拍、瞳孔の縮小、胸の動き、心拍音、腸蠕動音、痙攣状態、舌根沈下、舌の浮腫を確認することができた。このようなマネキンを用いることで様々な状況を作り出すことができる。この施設は現役の看護師や医者、医療職種の人々が利用でき、無料である。学生の利用も視野に入れているとのことであった。日本では現役の医療者が自らの知識や技術を訓練するための施設は少ないが、一方韓国では、このように無料で自らのスキルアップを図ることのできる施設がありこれは看護技術の向上やより質の高い看護の提供、様々なシチュエーションに対する対応能力の取得による円滑な救命処置などが期待できることが考えられた。

4) 学生間交流を終えて感じたこと

今回は5名のバディが我々の留學生活の世話をしてくれた。ソウル市への病院実習の日以外は毎日夕食を一緒に食べ、お店やカフェなどに連れて行ってくれた。これにより多くの話ができ仲を深めることができた。韓国のボランティア学生は非常に親切で献身的であった。英語でコミュニケーションを取りながら、互いの文化や考え方を理解し歩み寄ろうと看護の話から文化の話まで毎日幅広い内容の話をした。全員が自分を一人の人間として受け入れてくれ、国境を越えて人としての交流ができたと感じる。また、国は違っても同じ看護という道を進む学生同士、互いを高め合ってモチベーションを上げることができた。

IV. 学生のプログラムによる学び、評価

参加学生全員が、プログラム参加前に想定した以上に学びが大きかったと評価していた。ハルリム大学看護学部での授業や演習への参加により、教室内容での学習方法や内容、韓国人学生の学習への姿勢、日本との違いを知ることができたとの声が見られた。また講義や演習でも医療英語が頻繁に使われ、学生の医学用語への理解が高いことを目の当たりにし、刺激を受けたとの感想が見られた。日本の看護についての本学学生による英語でのプレゼンテーションでは、看護師の勤務体制や高齢化社会に日本の看護はどのように対応しているかなど数多くの質問が寄せられた。特に高齢者ケアへの関心が強いことが示された。またハルリム大学のボランティア学生にはプログラムの最初から最後まできめ細やかなサポートを受け、非常に感銘を受けていた。今回のプログラムでは安全事情も鑑み、1週間すべて春川市に滞在したため、毎日授業後一緒に夜ご飯を食べたり、観光したりと交流する機会が多くあり、仲を深めることができとても有意義な時間を過ごすことができたとの感想が寄せられた。主に英語を用いたコミュニケーションであったが、それぞれの国の言語を教え合ったりと異文化交流を深めることができた。

プログラム終了後、プログラムの長さ、事前の情報提供、留学先での安全、留学先での現地学生との交流の満足度について尋ねるアンケートを実施し

た。全員は非常に高い満足度を示していた。

令和元年11月5日に12時15分から13時まで、参加学生5名による短期留学プログラムの報告会を行った。学部生60名、学術課国際交流担当職員、学部長、学部教員数名の参加があった。

V. 今後の交流

今回は日本と韓国の冷え込みがある中での実施となったが、ハルリム大学側の配慮・協力も得て実施することができた。このような状況下で韓国に赴き、現地の学生と交流を深めたことは学生にも貴重な経験となったと思われる。全体を通じて、参加学生は期待した以上の学びや成果があったとの評価を行っていた。今回は、募集人数を上回る応募があり、規定通り選考を行ったが、今後はその基準についてもより本学の国際交流プログラムへの参加が反映され

るように見直していく必要がある。

また、国際交流委員会メンバーのみならず、委員会メンバーではない教員とハルリム大学看護学部の教員間の共同研究プロジェクトも始まっており、交流の広がりが見えつつある。教員間交流の開始から、2020年度末で10周年を迎える。今後もより交流プログラムの成熟を目指し、共同研究の輪が広がることが期待される。

利益相反

論文内容に関し開示すべき利益相反の事項はない。

謝 辞

本短期研修プログラムは、名古屋市立大学平成31年度特別研究奨励費の支援を受けて実施した。



ハルリム大学でのプレゼンテーション



病院実習



ハルリム大学付属病院スタッフと記念写真



ハルリム大学ボランティア学生との交流



最終日振り返り会